様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月３０日現　在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号：19530691
研究課題名（和文）　ヘーゲル主義からみたデューイ教育思想の再評価の動向とその可能性に関する研究
研究課題名（英文）　A Study on the Resurgence of John Dewey's Educational Thought and Its Critical Analysis from Hegelianism

研究代表者
松下　晴彦　(MATSUSHITA　HARUHIKO)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：10199789

研究成果の概要：デューイの思想形成は、従来、観念論期、実験主義期、自然主義期と捉えられ、その際特にヘーゲルからの影響は、観念論期には明確であるが、実験主義期には、ヘーゲル主義からの決別があったと解釈されてきた。この見方に対し、本研究では、第一に、デューイのシカゴ時代の講義ノート他の資料を重視すれば、彼のヘーゲルの関心は 1890 年代以降も持続し、その影響は自然主義期にまで及ぶこと、第二に、デューイ哲学の相対的で曖昧だとされてきた主要概念、探究、経験の連続性と再構成なども、ヘーゲル的な包括的、全体論的な概念と捉えるときにより善い理解が得られるということを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：デューイ、ヘーゲル、教育思想、教育哲学、アメリカ、自然主義

１．研究開始当初の背景

(1) デューイ思想および教育学一般の研究と紹介は、国の内外において、ほぼ過去一世紀にわたり行われてきた。その一般的な特徴は、先ず「デューイ思想を、観念論期、実験主義期、自然主義期に区分して捉え、最初の観念論期は、ヘーゲル主義の立場であり、後に克服、離脱された」と理解する。次に「教育理論は、シカゴの実験学校での実践を伴いながら、プラグマティズム、道

具主義の結実（シカゴ学派ともいわれる）となった実験主義期に形成された（その際、W.ジェームズの『心理学原理』からの多大の影響があった）」というものであった。

（2）こうした一般的な解釈に対し、近年米国において、「新ヘーゲル主義からのデューイの離脱、またジェームズやパースのデューイ哲学への影響を否定するものではないが、ヘーゲル哲学自体のデューイ思想への影響は、生涯にわたるものであった」という解釈が改めて提示され始めている。例えば、J.R.Shook の Dewey's Empirical Theory of Knowledge and Reality(2000), T.C.Dalton の Becoming John Dewey(2002), J.A.Good の A Search for Unity in Diversity(2006).また論文であるが、J.Garrison の The Permanent Deposit of Hegelian Thought in Dewey's Theory of Inquiry（2006）などである。

（3）これらの研究の論拠となっているのが、近年、新たに公開されはじめたシカゴ大学時代のデューイのヘーゲル哲学に関するセミナー、講義ノートである。デューイは、講義やセミナーを実施する際、今日の TA に相当する学生を速記録係にあてていたことは知られているが、新たに入手可能となった資料は、1896 年から 1900 年、デューイが依然ヘーゲルに強い関心を寄せていたことを示唆するものであり、一般的な解釈「1890 年以降、ヘーゲル哲学との決別があった」を覆すものであった。

（4）我が国では、デューイの初期の思想に関する先行研究として、栗田修『デューイ教育学の起源』松藾社(1979)、森田尚人『デューイ教育思想の形成』新曜社（1986）などがあり、デューイ哲学の起源として、ハックスリーの生物学的進化論、スコットランド学派との対決、英国のヘーゲル主義からの影響などを論じているが、上記の資料が知られる以前であったこともあり、デューイの生涯にわたるヘーゲル主義の影響については、考察の対象外となっている。本研究は、最新の資料とデューイ研究の動向を踏まえ、実験主義以降のデューイ思想にヘーゲルがどのように継承されているかという問題を、デューイ思想における「観念論の自然主義化」という観点から解明しようというものである。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、先ず、近年新たに公表されたシカゴ時代のデューイによる「ヘーゲルに関する講義ノート」他の資料とそれらをベースにした近年のデューイ再評価の研究動向を踏まえ、デューイ思想の形成過程のうち、特に実験主義以降におけるヘーゲルの影響について、再検討し、デューイ思想の諸概念と枠組みの淵源と展開をヘーゲル主義との関連で明らかにすること（デューイ思想の研究）であった。

（2）第二に、デューイの教育学的な言明、「成長としての教育」「探究（問題解決）」能力の育成についても「デューイ思想におけるヘーゲル的残滓」の観点から再検討することにより（デューイ教育学の研究）難解で実際にはあまり実践的でないとされてきたデューイ思想全体に関するより説得的で整合的な理解の枠組みを得ることであった。

（3）さらに、これまでデューイ哲学に対し、言語分析の手法から、「言語観」「論理学」「判断と命題」「形式と内容」「相互作用」などの概念分析により、デューイの術語の整合性とともに多義性を研究してきたが、今回、デューイ特有な用語の曖昧さについては、それをヘーゲル的な有機的な運動として捉える方法（再解釈の仕方）を提示することにあった。

３．研究の方法

（1）先ず、本研究の主眼であるシカゴ大学時代のデューイによるセミナー及び講義ノートを精査することにより、実験主義時代におけるヘーゲルに対するデューイの解釈を検討した。この時期は、デューイが精神を、有機体と環境との相互作用によってうまれる客観的な意識の過程と捉え、さらに有機体が環境に働きかけて適合していくときの知性の働きに注目した時期である。環境に適応する能動的な個人という捉え方とヘーゲル的な「絶対精神」（合理的に再構成された宇宙の実現）との比較検討、また当時デューイが使用していたヘーゲルのテキストとの照合もあわせて行い（実験主義確立期における）デューイ思想形成の新たな解釈を提示した。

（2）デューイのセミナー・講義ノートを論拠とする最近のデューイ研究をレビューし、「ヘーゲル主義からの決別」といわれてきた1900 年以降（さらに晩年に至るまで）のデューイ論文における「ヘーゲル的なもの」についての考察をおこなった。特に、ヘーゲルの「判断形成」とデューイの「論理学」における相似性、ヘーゲルの弁証法に対し、デューイの普遍・特殊・個別命題の峻別とそれらの間の相互作用的な捉え方など、両者の違いと相似性（つまり、デューイがヘーゲルから継承しているもの）について明らかにし、さらにこの「ヘーゲルからの継承」が他の自然主義的著作にどのように影響を及ぼしているかについて分析した。

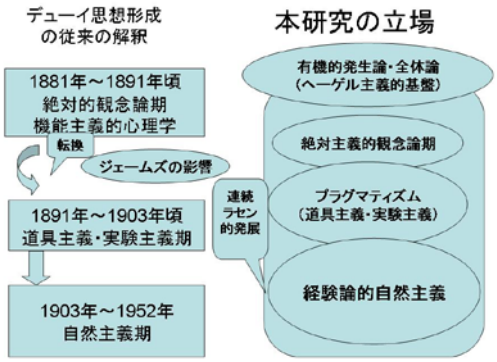
４．研究成果

（1）従来のデューイ教育学の解釈では、『学校と社会』『民主主義と教育』などにおける子どもの興味・衝動の重視、問題解決能力の育成、反省的思考の過程など、デューイの思索の帰結が教育方法への示唆として取りあげられ、次にいかに実践に活かすべきかという順序で語られる傾向にあった。帰結としてのデューイ教育学ではなく、実験主義の枠組みにヘーゲルの有機的な解釈の軸を加えること（デューイはヘーゲル主義者であったという解釈）により、有機体としての学習者の存在、外部を認めない探究、経験の連続性と再構成などのより根源的で、包括的、全体論的な理解が可能となる。特に、有機体と環境との相互作用、そこにおける知性の役割などは、ヘーゲル的な運動、弁証法的な枠組みにおいて捉えるときに最も容易な理解が得られると結論づけた。

（2）さらにデューイには、その語彙が曖昧で相対主義的だという批判が向けられてきた。例えば通常、我々は、対象を研究して内容を得ると考えるが、デューイは、（探究において）内容を操作して対象を得ると考える。探究の subject matter が思考において主題化され（objective）、検証されて object へと変換される。デューイにとって探究の対象は、帰結としてあるもので、探究の操作とは別に予め想定されているものではない。このことは、思考操作の前に存在する知識対象を否定したヘーゲルの考え方を継承したものと捉えると理解は容易となる。デューイにとって、論理学とは探究の理論に他ならないが、デューイ論理学の主要な操作概念、推論やデータ、事実と観念の相互作用（運動）なども、ヘーゲル哲学の「概念形成」における三つのモーメント、存在、非存在、生成を「自然主義化したもの」と再解釈できると結論づけた。

（3）本研究は、このように、デューイ教育学の難解さと曖昧さをヘーゲル的な解釈で補うことにより、より実践的で具体的な理論へと転換する枠組みが得られるのではないかと結論づけた。今後、デューイ思想における「ヘーゲル的な残滓」を探究するための指

標となるイメージを図示すると以下の通りである。



５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１　件）

①松下晴彦「19 世紀のミシガン大学とジョン・デューイ」（『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第 54 巻　第 2 号　2008 年 3 月、59－70 頁。査読なし

②松下晴彦「ジョン・デューイの中等教育観」（『名古屋大学大学院教育発達科学研究科　中等教育研究センター紀要　第 8 号 2008 年 3 月、87－95 頁』査読なし

③松下晴彦「現代の高校生における友人関係の捉え方」（『名古屋大学大学院教育発達科学研究科　中等教育研究センター紀要 第 8 号　2008 年 3 月、69－85 頁』）査読なし

④松下晴彦「これからの教育哲学を考える」（教育哲学会『教育哲学研究』第 97 号、2008 年 5　月、63－68 頁）査読あり

⑤松下晴彦「デューイ論理学における「自然化されたヘーゲル主義」」（『日本デューイ学会紀要』第 48 号　2007 年 10 月、55-64 頁）査読あり

⑥松下晴彦「学習空間的再造与学習方式的変革」（翻訳　方明生）（『現代教学』第 210 期、2007 年 10 月、中国・上海、pp。57-60）査読なし

⑦MATSUSHITA, Haruhiko, “Strategy for Individualized Instruction and Learning, in Collected Works on The First International Forum on Teaching Reform, East China Normal University, May, 2007, pp. 62-68.　査読なし

⑧MATSUSHITA, Haruhiko, “Philosophical Perspective for Teachers and Aims of Integrated Learning, in Collected Works on The First International Forum on Teaching Reform, East China Normal University, May, 2007, pp. 153-157.　査読なし

⑨MATSUSHITA, Haruhiko, “The Reconstruction of School Knowledge,” in Collected Works on The First International Forum on Teaching Reform, East China Normal University, May, 2007, pp. 283-292. 査読なし

⑩MATSUSHITA, Haruhiko, “Moral Education in Ethically Relativistic Age,” in Collected Papers on The International Symposium on Curriculum Reform and Social Progress, College of Education, Zhejiang University and Xia Cheng Educational Bureau, Hangzhou, October 2007, pp. 52-61 査読なし

⑪MATSUSHITA, Haruhiko, “On Some Aspects of Learning Experiences; Acquisition Model, Participation Model and Inquiry Model,” Collected Papers on The International Symposium on Curriculum Reform and Social Progress, College of Education, Zhejiang University and Xia Cheng Educational Bureau, Hangzhou, October 2007, pp.32-42.　査読なし

〔学会発表〕（計５件）

①松下晴彦「デューイ教育思想の弱点―方向性なき成長不安：ヘーゲル的残滓と進化論的自然主義」日本デューイ学会第 52 回研究大会、2008 年 10 月 13 日、筑波大学（東京キャンパス）

② MATSUSHITA, Haruhiko, "Educational Divide in Japan; Polarization in Academic Achievement, Economic and Social Disparities," International Conference on Balanced Development of Education and Society's Progress, in Ningbo, China, October 28, 2007.

③ MATSUSHITA, Haruhiko, "On Some Aspects of Learning Experiences; Acquisition Model, Participation Model and Inquiry Model," at International Seminar on Curriculum Reform and Social Progress, The 5th China Hangzhou International Conference on Ecucational Innovations in Hangzhou, China, October 25, 2007.

④ MATSUSHITA, Haruhiko, "On Some Aspects of Learning Experiences; Semi-Lattice, Tacit Learning, Qualitative Thought," The ICI Famous Professors' Forums, at Institution of Curriculum & Instruction, East China Normal University, May 28, 2007.

⑤MATSUSHITA, Haruhiko, "Some Strategies for Individualized Learning in an Information Age," at World Conference on Transformation of Classroom Teaching, in Shanghai, China, May 27, 2007.

〔図書〕（計２件）

①松下晴彦「論理的思考と仮説的推論」（26～29 頁）浅沼茂編著『活用型学習をどう進めるか』（教育開発研究所、2008 年、6 月）

②松下晴彦「論理的思考力を育てる探究型学習」（24～27 頁）浅沼茂編著『探究型の学習をどう進めるか』（教育開発研究所、2008 年 8 月）

６．研究組織

(1)研究代表者

松下　晴彦　（MATSUSHITA　HARUHIKO）
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：10199789